

図書館への入口

―大学院ゼミ企画「アジ研図書館ツアー」に参加して―

平田 晶子

私は、東京外国語大学大学院（以下、東外大）の修士課程に進学後、タイ东北部とラオスに居住するラオの人たちの地域芸能や伝統音楽に関する人類学的研究をしてきた。この学問分野に従事していると、大学院の長期休暇及び二年間の海外長期滞在の現地調査でタイやラオスの農村社会に赴き、村びとたちの食事をはじめとする日常生活から、地域芸能の公演現場、宗教行事、儀礼といった非日常の出来事まで、可能な限り村人の話を聞いてフィールドノートを取り続ける。さて、このように普段の研究生活では村落社会やコミュニティに定着して調査している者が、アジ研図書館（以下、アジ研図書館）という膨大な資料の宝庫をどのように活用することができるのであろうか。

私がアジ研図書館に通い始めたきっかけは、大学院時代に人類学ゼミの有志で企画したアジ研図書館ツアーであった。事前にアジ研図書館に勤務する東外大学院修士生の司書小林磨理恵さんとコンタクトをとらせていただき、当日の館内案内、各参加者の要望に合わせた確かな資料の所蔵場所の説明などをお願いすることにした。

過去一〇年間の私の関心は、タイ国内の総人口の三分の一を擁しながらも農業生産力が低いことから「貧困地域」として形容されてきたタイ东北部に住む人びとの芸能文化的営為の変容

である。一九七〇年代以降、都市部では相互扶助的な性格をもつ地域芸能奨励事務所の設立が顕著となりはじめ、血縁集団を核にして動く芸能集団の文化的活動が盛んに行われていた。この現象に気づいたとき、私は、農村社会を基盤に置く芸能集団の生活にも何らかの変化が生じているに違いないと考えようになり、ラム歌唱という特殊技能を駆使しながら、農閑期などに芸能活動を行うモートルムと呼ばれる歌い手の生活実態を調べることにした。

そこで、まず、私が注目した資料は、国家統計局が刊行する「家計社会経済統計調査」の資料だった。この資料には、タイ东北部の世帯の平均月収と農業収益による平均月収額が詳細に記載されている。国内で最も古い一九六八年から最新の二〇一二年までの資料が所蔵されているのはアジ研図書館だけである。ネット上の部分的なデータも公開されているが、サンプルの取り方、統計局の分析結果等は記載されていない。具体的にを行った作業は、一九七〇年代から二〇一〇年代までの四〇年間分の世帯平均月収と支出・収入、農業収益額の変動をエクセル表にまとめ、農民の経済状況を数値化することであった。こうした数値を日本に居ながらにして分析できるのも、アジ研図書館でしかできないことである。この作業により、農民であると同時に芸能・音楽の担い手でもあるモートルム芸能

者の音楽芸能活動が、いわゆる「伝統文化」の保護と継承を意義付ける文化的行動であるという短絡的な議論に留まることなく、農村社会における芸能文化活動が、現代社会の文脈において一家の生計を立てていくことができる一つの「仕事」や「職業」として変容していく状況を浮き彫りにすることができた。

「家計社会経済統計調査」以外にも、アジ研図書館には様々なタイ関係資料が所蔵されている。私は、電子技術やメディアの変化にも関心を抱いていたので、タイ国内の携帯電話やインターネット動向について調べる機会があった。その時は、盤谷日本人商工会議所が刊行する『所報』や特集のタイ国日系企業景気動向調査報告などを参照した。また、日本タイ協会から毎年刊行される『タイ国情報』も絶えず更新されており、タイに関係する最新のデータを確認することができた。

アジ研図書館ツアー企画の成功の裏には、司書の小林さんだけではなく、タイを専門とする重富研究員との意見交換も忘れられない。重富氏は、東北タイ農村社会の最新の「共同体」論や、対象とする地域社会の特性を描き出す際に注目すべき実証的な資料について大変有益なお話をしてくださった。さらに、帰り道は、ゼミの仲間たちとどのような資料を入手できたかなど情報交換し合いながら、駅近くの豚カツ屋さんで報告会を行った。今後より多くの学部生や大学院生などにも積極的に活用され続けることを心から願っている。

（ひらた あきこ／日本学術振興会特別研究員 PD）